

今井源衛著 『紫林照径一源氏物語の新研究』

森下, 純昭
岐阜大学教養部教授

<https://doi.org/10.15017/12073>

出版情報 : 語文研究. 49, pp.32-35, 1980-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

紹介

今井源衛著 『紫林照径——源氏物語の新研究』

森 下 純 昭

本書は、『源氏物語の研究』（昭37）『王朝文学の研究』（昭45）に続く、著者の第三番目の論文集であり、昭和四十五年以降諸処に発表された多くの論文の中から、源氏物語関係十八篇が選び収められている。所収の論文は、対象のあらゆる側面や可能性を謙虚に見つづけてこられた著者の、真摯な学問的姿勢から生み出された鮮やかな成果であるが、同時にここには「新研究」と副題される如く、著者の長年に亘る源氏物語研究を踏まえて、多くの問題提起がなされており、今後の源氏物語研究に多様な課題が提示されている。まさに「紫林照径」の書であり、本書の時宜を得た刊行はまことにありがたいことであった。

さて、本書の内容は次の如く、大きく三部に分かれている。

第一章 八雲式部の時代と家庭 V 一条朝と源氏物語 / 紫式部の父系 / 紫式部と清少納言

第二章 八雲素材と構想 V 「前渡り」について / 源氏物語における人間と政治 / 菅公と源氏物語 / 菅公の故事と源氏物語古注 / 「氷とち」の歌をめぐる / 伏せられた引歌 / 第二部

の世界 / 柏木と女三宮 / 竹河巻は紫式部原作であろう / 「宇治橋」の贈答歌について / 人妻を盗む話
第三章 八雲響と資料 V 女子教訓書および艶書文学と源氏物語 / 島原松平文庫本「十番艶書合符立聞」と同「女房艶書合」 / 島原松平文庫本「源氏長歌」 / 東北大学狩野文庫本「今はむかし物語」

論文掲載誌一覧 / 索引

以下、それぞれの内容を簡単な要約によって紹介していきたい。

第一章に収められた三篇は、著者の研究の方法・視点を明確かつ特長的に示す諸論であり、前記二論文集の蓄積およびすぐれた伝記研究「紫式部」の成果を踏まえての立論である。まず、「一条朝と源氏物語」においては、源氏物語の混沌として複雑な世界は、一条朝の爛熟期の複雑な時代性と大きくは関わるとの観点から、源氏物語における帝王像の変化、時代設定、光源氏造型等における二重構造化、伊周の事蹟と源氏物語との関係などを概括的に指摘して、時代との関わりの問題を考慮に入れないでは、「源氏物語の作品分析と

いうものも、大きな盲点を生ずるのではないか」と問題提起されている。これは同時に、本書全体を総括する問題提起のことばともなっている。「紫式部の父系」では、紫式部の作家的資質がその父系において追尋調査されている。式部の父為時に至る利基以降五代の系譜は、一般的受領とは異なり、特に兼輔から為時の世代にかけてかなり濃厚な文芸的雰囲気を持っていたことが、多くの資料によって綿密に跡づけられている。本稿の骨格は、既に「紫式部」において提示されているが、ここではそれがさらに豊かに肉づけされた。

「紫式部と清少納言」では、諸家の論を踏まえつつ、紫清両者の違いと共通性とは浮き彫りにされる。はじめに性格学的見地による両者の体型と性格との違い、与謝野晶子が指摘した鋭敏な感覚性の質的相違、さらには対象に対する時間的把握の有無の問題、そして階級意識の違いなど、多様な観点から紫清の個性の違いが鮮やかに導き出されている。次いで後半では、紫清の晩年における歌に共通する「希望のない、落莫流離の感」が注目され、それは共に同時代的苦悩運命を免れ得ない、歴史的社会的存在としての紫清の生きざまとしてとらえられている。

さて、第二章の素材論・構想論は、「はしがき」にもあるとおり本書の中心であり、作品の内部検証だけでは説明し難い点が、作品の生まれた社会との関連で説明されており、ここには多くの新しい成果が提示されている。「『前渡り』について」は、この語が平安時代特有のニュアンスをもった成語として定着していること、また文学表現としての男女の位相差が、各種用例の詳細な検討から具体的に導き出される。同時に、蜻蛉日記と源氏物語の作者の異質性、あるいは源氏物語の「極度に切りつめた原文の重み」などが、この

語を通して新たな角度から具体的に測定されている。「源氏物語における人間と政治」では、源氏物語における「政治と人間」の取り扱い方が、最も濃厚に政治的状況が絡んでいる須磨巻において、政治的敗北者である源氏が結局は人間的勝利者、政治的勝利者となる「文学的形象の意味」を問う形で検討される。ここで、従来問題とされる源氏の罪意識の矛盾が手がかりとされ、これを法と内的道德の次元の位相差として理解する著者の視座から、作者において「人間と政治」とは、「かなり典型的に二元論的に、あるいは相互に矛盾する概念」であると結論されている。

「菅公と源氏物語」「菅公の故事と源氏物語古注」は、菅公の故事が源氏物語の素材・構想・表現に種々の大きな影響を与えていることの詳細な考察である。前者では、須磨巻に及ぼした菅公の影響が、古来の準拠説に照明を与える形で詳論されている。特に、落雷・桐壺院の亡霊等に菅公の故事を指摘する岷江入楚の説が、つぶさに検討されよみおこされて、菅公の故事が源氏物語の素材となった事情が明らかにされた。「菅公の故事と源氏物語古注」は、須磨・明石両巻において、南北朝までの古注が準拠とした菅公の故事十三カ条についての再検討である。この中、現在定説化されている三カ条の外、さらに三カ条が妥当な説として復活されている。先の「菅公と源氏物語」と合わせて、菅公の故事と源氏物語との深い関わりが、改めて丹念によみおこされている。

「『水とち』の歌をめぐる——権巻における紫上——」においては、紫上の源氏との贈答歌「水とち」の解釈如何は、紫上の人間像ひいては従来問題となっている権巻の位置づけにも関わると問題提起し、まず従来の説がこれを叙景歌の線で解釈していることを批

判し、真淵の新釈だけが紫上の苦悩の吐露と解していることに触れ、この場面までの紫上をめぐる状況、当該歌の解釈、権巻全体の内容検討の結果、真淵がこれを源氏の浮気に基づく紫上の憂悶と解したこと、正当性を評価し、「ここ権巻には、すでにその後の紫上の姿の前兆がはっきりと刻印されている事を見逃す事はできないであろう」と、結論されている。「伏せられた引歌——刈萱の場合——」は、本文に同化した引歌の丹念なよみおこしによる野分巻の夕霧論である。野分巻で、夕霧が雲居雁に歌を送る一節に「吹き乱れたる刈萱につけたまへれば」とある部分は、和歌の世界の「刈萱」と「乱れ・思ひ乱れ」の縁を踏まえており、かつこの折の夕霧の念頭にあったのは「まめなればよき名も立たず刈萱のいざ乱れなむしどろもどろに」（古今六帖）であろうとし、「野分巻にすでに、彼が「まめ人」を以て自ら持しつつ、しかもそれに対する青年らしい内心の反乱をも意識しつつあった」ことが、明らかにされている。

「第二部の世界」では、いわゆる三部作説を「作者の意識面」で解すれば妥当な見解であると認めた上で、内容の特質と問題点が検討される。物語内容を、女三宮と柏木の物語・夕霧の物語・紫上の死・光源氏の回想から成る光源氏の老年の物語とし、若菜下巻の御代がわりと四年の時間的空白も「生理的・年齢的な意味での新旧の世代の交代」を意味し、若菜から夕霧までは「人間関係における錯誤と不信と崩壊の歴史」であるが、紫上の死・光源氏の回想を内容とする御法・幻面巻は、「人生の根源というべき生と死と時間とが、そのもつとも純粹な形」で描き出されており、「第一部と共に第二部もやはり、理想人光源氏の物語」であったとまとめられている。

「柏木と女三宮」光源氏の「老年の物語」の意味を余すところなく描き出した柏木・女三宮の事件は、これが世代の相剋の問題として提出され、女三宮降嫁の状況設定も史的事実を背景としていることから、「基本的には社会悲劇的要素」が強く、事件そのものの重みの中に柏木や女三宮等の性格が反映するが、結局は仏教的宿命観に落ち着かせるはかないものであったこと、また柏木の死の苛酷な結末は、光源氏が超越的存在から人間的真实性をかちとるための犠牲として意味づけられている。

「竹河巻は紫式部原作であろう」では、竹河巻の作者の問題が新しい観点から再検討されている。まず論点の一つである表現措辞の問題は、作者論としてはそのすぐれた部分をおさえるべきだとし、作者の基本的筆力を評価し、加えて紫式部集所収歌との表現・用法の類似性から、紫式部原作の可能性が推論される。これを踏まえて、最大の争点である夕霧「任左大臣」等の官職の問題については、光源氏・頭中将の官歴、濡標以降竹河巻の夕霧を除いて実質的な左大臣がいない事には、「左大臣道長」の存在が大きく関与していると指摘して、竹河巻の夕霧任左大臣等は玉璽が不如意を嘆く場面を効果的に表現するためであったが、宇治十帖において品のいい敵役である夕霧が、道長を連想する「左大臣」では具合が悪く、それゆえ竹河巻の昇進の記事が無視されるに至った事情が、詳細に論述されている。

「宇治橋」の贈答歌について——宇治十帖の主題——は、総角巻の勾宮と中君の贈答歌、浮舟巻の薫と浮舟との贈答歌に共に「宇治橋」が詠まれていることの意味が、構想論的に解明される。これら二組の贈答歌は、それぞれの時点で「以後の悲劇的展開の伏

線」となっていること、また「宇治橋」「橋」のもつイメージが、「源氏物語」を通過する事によって、確実に男女間の不安定な関係、とだえを意味するものとなりおさせ」ている事が通史的にも明確にされ、橋姫——総角の大君の物語と宿木——夢浮橋の浮舟の物語とが、主題的に見事に呼応することを端的に示すのが、この二組の「宇治橋」の贈答歌であると結論されている。

「人妻を盗む話——浮舟巻補注——」では、この種の話の文学的素材としての裾野の広さと、そこに見られるこの時代独特の雰囲気が多く資料をもって解説され、浮舟巻で勾宮が薫になりすまして浮舟を盗む条に見えるいくつかの不審点——供人・香・声色等の件は、女を盗むという特殊なモチーフによる構想上の不整合だとされ、夫になりすますという点には特定の材料があったかとして、仲文集のかなり虚構化された例が指摘されている。本論は、構想上の若干の不整合を素材の「類型性」の面から説明を試みた論である。

「第三章 影響と資料」編は、源氏物語の享受史に関する研究と資料の紹介であるが、この享受史の中でもこれまであまり注目されなかった、中世のいわゆる女子教訓書の類、および艶書ものの一群が研究対象としてほりおこされている。「女子教訓書および艶書文学と源氏物語」では、この分野の代表的諸書について源氏物語の影響と、その性格・問題点がよく整理解説されており、ゆきとどいた概説である。資料は、島原松平文庫本「十番艶書合付立聞」と同「女房艶書合」・同「源氏長歌」・東北大学狩野文庫本「今はむかし物語」が、解題解説を付して全文翻刻されており、善本・新資料の紹介である。

以上、複雑な紹介であるが、本書に収められた諸論には、研究対

象の多面性に応じて、まことに多様な問題提起あるいは研究領域の開拓・方法的試みなどに溢れていることが知られよう。これらの提言の底には、基本的には作品をその生まれた社会との関りの相ととらえ、一つ一つの事実を丹念にのみおこしてゆくことが大切だとされる著者の立場があるわけだが、現在の時点で著者があえて自らを「半ば死語化したつある」「歴史社会学派」と位置づけつつも本書の副題を「新研究」とされたのは、内部検証による精緻な作品分析が深まった今日の次元でなお解決困難な問題解明のために、準拠論を最大眼目の一つとする河海抄をはじめとする古注がよみおこされつつある研究状況が踏まえられてもいる。源氏物語に限っていえば、作品をその生まれた社会との関りの相でとらえる視点は、古くてなお新しい重要な視点といえよう。この意味でも、本書をどのように受けとめるかが今後の研究の一つの課題であろう。

(昭和五十四年十一月、角川書店刊、三一七頁 四、八〇〇円)